

2011年 5月26日・下野新聞では

危惧したことが現実に…

「福島原発難民」地元詩人が発行

40年前から悲劇予言

詩や評論 15篇を収録

40年も前から原発に警鐘を鳴らし続け、自らも東京電力福島第1原発の事故のため福島市に避難した、福島県南相馬市在住の詩人若松丈太郎さん（75）が「福島原発難民」と題する著書を緊急発行した。同原発が発電を開始した1971年から2007年までに書いた詩やエッセー、評論など15編を収録。原発が地域住民を取り込みながら被ばく者にしていく悲劇をえぐり出した。隣県の本県にとっても原発災害や地域振興のあり方は人ごととは思えない。（石川文子）

冒頭の詩は『みなみ風吹く日』。原発から25*_{km}圏内の福島県浪江町の民家の庭先で78年6月、ムラサキツユクサの花びらにピンク色の斑点が現れた。しかし、「原発操業との有意性は認められない」とされた。第1、第2原発で制御棒脱落事故が数度にわたって発生しながら、07年3月まで隠蔽されたことなどを時系列で盛り込み、原発の危うさと推進側の非人間性を告発。「世界の音は絶え 南からの風が肌にまとう われわれが視ているものはなにか」と結んでいる。

評論『チェルノブイリに重なる原発地帯』は、地域経済への波及効果と人口増が期待された原発近くに進出する企業はなく、交付金減額でさらに原子炉増設を凶らなければならない悪循環を指摘した。南相馬市と同じ原発から25*_{km}圏がどのような被害を受けるのか。チェルノブイリで目の当たりにした体験を、同市の未来として警告した連詩『かなしみの土地』は今、胸に迫るものがある。

「危惧したことが現実になり、慨嘆に耐えないが、これまでに書いた詩文を1冊にすることが後代を生きる人々への責務」と、若松さんは後書きに記す。

発行元のコールサック社は「原発に疑問を持ち始めた人や自然エネルギーの可能性を模索する人々に読んでほしい」と訴える。

若松さんは岩手県出身。福島大を卒業後、福島県立高校教員を務めた。その傍ら、埴谷雄高や島尾敏雄ら相馬地方が生んだ文化人の業績発掘にも取り組んできた。（1500円）

と紹介されています。